

## 『グローバル天理』第10号（通巻22号）掲載論文要旨

### 井上昭夫 巻頭言 「「文明の衝突」に見る「善と悪」」

イデオロギーに代わって冷戦後は多様な宗教や民族に基づくいくつもの文明がその存在を主張するようになり、米国だけが唯一の超大国であるかのように傲慢に振る舞うのは、地域大国や他の文明から反逆をもたらすだろう。米国での同時多発テロによる攻撃は、それを物語っている。それはまた一神教の「善と悪」との二項対立における正義が二分化された争いでもある。

### 荒川善廣 「「元の理」の探究（7）混沌からの創造 [4]」

現代宇宙論の興隆によって、これまで科学の対象外であると信じられてきた「宇宙の創造」という出来事が、物理学の法則から語るできるようになったと言われている。物理学者は真空（vacuum）を、時間も空間も物質もない「無」ととらえる。だが、プロセス哲学（process philosophy）では、真空（empty space）といえども最低段階の現実存在（actual entities）から成っていると考える。物理学がビッグバン理論の前提としている真空（vacuum）とは現実世界の最初の姿を指しているのだから、そこにはすでに親神の十全の働きが入り込んでいるのである。

### 北詰洋一 「紛争回避のテクノロジー（7）同時多発テロと「十字軍」」

10月に起こった米国の同時多数テロの悲惨さは目に余るものだった。こうした非人道的な行為を二度と起こさないためにはどうしたらいいか。簡単に回答は出てこない。ただ早急に考える必要がある。その材料として、今回は、紛争を宗教戦争にさせないこと、無辜の民をこれ以上犠牲にしないための情報を二つ提供する。

### 末延岑生 「ことばと教育（7）ことばの元を探る [7]」

神授説を論じるに当って、神授説に価する神であるためには、まず、神としての資格が問われなければならない。人間にことばを使うことの自由を与えない神、しゃべる内容についても規制され、神の思い通りでなくてはならない神の元にことばが創造できるであろうか。人間はそうした神に束縛されて、神の思うままの従順な生きかたをして果たして満足できたろうか。

つまり、いかにことば自身が神聖なものであろうとも、人間の強い心の自由への欲求に

対しては、母なる神は蓋ができなかった、逆らえなかった、ということではないだろうか。そう考えればバベルの塔の件は、神からの罰というよりも、人間は、そうした人間の自由をも束縛するような神の権威への第一反抗期であり、昆虫のような閉ざされた社会からの開放、いわば“ことばのルネッサンス“を象徴しているとみることができる。牧師でもあり、神学者でもあったヘルダーが、神授説を全面的には採用しなかった理由がこれによって明らかとなろう。

このようにして人類は、神の与えたことばを振りきって、自分たち自身のことばを勝ち取った。このように、バベルの塔を造り、選別され、「心の自由」の入ったパンドラの箱を開けてしまった人類は、一方、創造主である神の加護からも見放されたまま、多くの苦しみや悩みを抱えて、それでもなお、勝ち取ったはずの、しかも神の最も嫌う、人間が人間らしくあるための「心の自由」を求めて、今に至っている。

### **金子昭 「天理経営学—その歴史・哲学・展望（16）教学編 天理経営学とは〔1〕陽気ぐらしと営業」**

私のささやかな体験から、陽気ぐらしの種を蒔く「営業活動」のあり方について考察した。相手にどんなに邪険に扱われても、決して心を倒さず、否定的な心の連鎖を自分の元で断ち切り、新たに自分は人々を勇ませ喜ばせるスタート地点をとることが、天理経営学のひとつの実践としての営業活動の姿である。

### **堀内みどり 「天理異文化伝道（21）天理教のコンゴ伝道〔20〕2代会長時代〈1967—1971〉〔1〕」**

1967年7月にコンゴブラザビルの2代会長に任命された清水國弘は妻と共に、9月にコンゴへ着任。11月12日に2代会長就任奉告祭執行。14日2代真柱の訃報。翌年8月に政変勃発。コンゴは共産主義的な政治を展開することになる。このような変化の中で、清水は積極的な布教の展開を目指し、また、教会以外に布教拠点を設置しようと決心する。

### **小滝 透 「天理比較神秘論への試み（22）仏教と教祖〔3〕修験道」**

浄土教に引き続き、教祖の前に現われた修験道について論じてみた。修験道は日本古来の山岳信仰の上に道教（神仙道）・神道・シャマニズム・仏教等が混合してできたものだが、教祖が神懸かりとなる契機にもなっており、その後も同じ信者層を競合したことで初

期天理教の強力なライバルになっていた。今回は、修験道と教祖の関係を宗教的歴史的に辿ってみた次第である。

## **小林正佳 「芸術・癒し・宗教（22）心の形成」**

わたしたちが身体的に感じた情動を悲しみや喜びとして体験するには、他者との交わりを通してそうした感情を学び取らなければならない。誰かのからだに、あるいは、心に生じた出来事を「悲しみ」や「怒り」として理解するのは、まずもって他者の眼差しにほかならない。人間関係の中での他者の眼に支えられて、自分自身にさえ理解可能な人間的な心が生まれてくる。とすれば、人間の心が育って行くためには、幼児たちを包み励まし、かれらの成長をそれとして確かめてくれる人間の輪がなければならない。

## **金子珠理 「ジェンダー女性学情報（21）社会福祉とジェンダー [6]**

児童虐待の増加などにより、里親とくに養育里親に対する社会的需要は高まっているが、里親への児童委託は不振状態にある。その原因を探りながら、同時に専門里親制度発足の動きにも言及する。

## **上杉武夫 「都市の再生に向けて—アメリカ通信（18）子供達に懐う」**

9月11日の同時多発テロの惨劇は言葉では言い表せない。そして、この現代文明の危機を乗り越えるためには、子供達の「お父さんとお母さんは大丈夫？」「テロリストって何？」「戦争が起こるの？」といった質問に適切に答えていかなければならない。また、外傷後ストレス障害（PTSD）に苦しむ人々に、時に応じて根本的な救済手段を講じなければならない。ニューヨークは再生できるだろうか？これは事件以来憎しみと悲しみに苛まれている子供達に対する我々の責任も問い掛けている。

## **特別連載・シンポジウム 「天理スポーツを語る」（9）**

### **飯田照明 「二代真柱様とスポーツ[1]」**

中山正善二代真柱は、自ら柔道やラグビー、テニス、水泳、スキーなど多くのスポーツを楽しんだ。そして、スポーツは肉体のみならず精神の鍛錬にとってもすぐれた手段であるところから、教信徒にもスポーツを勧めた。それは、天理教の究極目的は現世における陽気ぐらしであり、それには健康と長寿が重要な要素となるからだ。また、二代真柱は各

種スポーツ団体の代表や役員を務められ、スポーツの振興に大きく寄与した。特に柔道の国際化には多大な貢献をした。